

男性性の傷つきに敏感なジェンダー臨床論のために（その7）

－ 脱男性性をめぐるラビリンス（迷宮）－

For Gender-Sensitive Clinical Approach to Wounded Masculinity

(7) An experience Analysis of a Young Male : A Survival from Masculinity Crisis

國友万裕（同志社大学）／中村正（立命館大学）

Kazuhiro Kunitomo (Doshisha University) / Tadashi Nakamura (Ritsumeikan University)

Key words: ひきこもりからの脱却、触れられたくない過去、セルフネグレクト

departing from withdrawal, traumatic past, self-neglect

1. 課題：男性性ジェンダー論による青年の体験の考察-言葉のない問題を照らし出すこと

ジェンダー社会における女性の被抑圧的地位に由来する被害は、女性学・フェミニズムの視点から社会的に認知されているが、被害とまではいわないにしても広く男性に関わる諸困難についての認識が同じ程度になされているとはいえないし、そうした立論の必要性についてさえ懐疑的な論者もいる。男性が何らかのジェンダー関連の被害、不利益もしくは臨床的ニーズを訴えると、本人の意識や行動の特性に帰責されてしまい、社会的な問題の相において認識をすることが困難になる。問題の隠蔽・否認、自己責任化であり、強いセルフネグレクトともいえる。まとめると、何らかの困難や生きづらさを訴えられないことが、男性性ジェンダーの中心にある。そこで、男性問題の特性取り出し、ジェンダー社会における対人援助や臨床実践の裾野を広げる必要がある様相を指摘したい。そのために現在 50 歳代となったある男性の経験の分析を行っている一連の研究である。今回は、男性性ジェンダー役割に適応できずにいる「彷徨経験」の諸相について考察する。男性性ジェンダーの自己同一性構築に困難をもたらすという観点からの心的苦痛と名付けの作業を行う。

2. 方法と分析：男性性研究によるエピソード分析

ある男性の 30 歳代の人生経験の意味をカウンセラーや社会運動家たちとの関わりの視点から考察する。「その6」での分析と考察はジェンダー論が隆盛し始めた 1980 年代から 90 年代であったのでそれに続く時期である。

男性性ジェンダーという言葉もない社会のもとで、不定愁訴のような言葉のない問題を生きにくさとして抱えていた様子が見えてくる。以下、いくつかの詳細な出来事の中括弧にし、7つに言語化したエピソードを取り出した。それはまだ名前のない苦悩のなかを生きだしたことの振り返りの言葉でもある。

(1) ひきこもりから社会へ（29 歳で、初めて非常勤講師の仕事始める。30 歳になって仕事が増え、本格的に社会に出るが、不登校で高校に行かず、それまでひきこもってきたブランクは大きい。過去に触れられたくないため、友人もできない日々が続く。どうにか仕事をこなすのがやっとの日々だった。30 歳から心療内科に通い始め、カウンセリングも受け始める）

①30 歳、最初のカウンセラー A さんにつく。25 歳の男性。大卒。天才肌だがアルコール中毒。人間関係を築けないことと過去のトラウマを整理できないことを相談する。それまで誰にも語れなかったことをある程度は話することができるようになる。

②31 歳、A さんのカウンセラーは週 1 回のペースで 1 年受けたが、A さんがアルコール依存症で仕事を休むことになり、B さんのカウンセリングを受け

ることになる。32 歳女性。大卒。男らしい男の子ではなかったことで傷ついた少年時代の記憶を訴える。

③32 歳。B さんとうまく行かなくなり、ほかの心療内科に行ったところ、3 人目のカウンセラー C さんと出会う。40 歳男性。大学教員。アメリカの大学院で学んだ経験を持つ人で、セルフサポートの斬新なカウンセリング。一生に影響を与えるような出会い。一気に問題の整理が付き、人生や社会への見方が大きく転換する。

(2) 社会の物語-救いのように思えたメンズリブ運動との出会い（34 歳の時、メンズリブ運動と出会う。自分と傷を分かち合える男性の友人を探すことが当初の目的だった。）

①社会運動家の男性たちとの出会い。主当時 40 代から 50 代くらいの男性たち。収入がほとんどないのに、社会に対抗して生きている人たち。その破天荒な生き方に圧倒される。しかし、自分とは違うタイプの男性たちであるため、疎外感を抱く。

②フェミニスト・カウンセラーとの出会い。当時 50 歳の女性。ジェンダーの悩みや強迫症を打ち明ける。ジェンダーの問題を勉強している人なので、話もスムーズに伝わり、あれこれ教わることの多い出会い。しかし、彼女は女性。男の傷を分かち合うことはできない。

③マザコン男のメンズリブとの出会い。東京のメンズリブのメンバーたちとのトークに参加。当時 30 代から 20 代の男性たち。弱者男性、非モテ系、自分に自信がなく、女性とも付き合えないタイプの男性たち。自分と重なり合う部分が多く、楽しいトークのひとつ。これがメンズリブ時代の良い思い出となる。

3. 考察

男性性の傷つき（被害特性や脆弱性）に敏感な男性性ジェンダー論の展開にとって、自我同一性・アイデンティティ概念は再考されなければならぬと考える。女性性ジェンダーについても同様な問題提起があった経過に鑑みれば重要な作業となる。これらのエピソードはジェンダー概念が登場しつつあった時代の裏面から、沈黙化しがちな男性性ジェンダーの可視化として位置づけることができる。ジェンダー社会を男性の個人史的な次元で切り取ることでマジョリティ問題の内奥が見えてくる。抑圧の「深まりと広がり」がその裏の面から可視化されてくる。

文献：

國友万裕 「男は痛い！」『対人援助学マガジン』（連載）

中村正 「不安定な男性性と暴力」、『立命館産業社会論集』、52 巻 4 号、2017。

中村正 「妄想=暴走する男たち-ハラスメントの要の位置にある男性性ジェンダー」『臨床心理学』18 巻 5 号、pp.561-568、2018。